

年間第 30 主日 (ルカ 18:9-14)

私の祈りは私の生き方



イギリスの首相が在任 45 日で辞任することになりました。45 日で職を辞した経験はありませんが、ある意味、勇気の要る決断だったと思います。司祭館でそれに関連して、イギリスの首相は定期的に国王に国内情勢を報告する務めがあると話していると、王位継承について話が広がりました。

「チャールズ国王の後継者はウィリアム王子だと思うけれども、どうしてウィリアム王子とヘンリー王子ではあんなに髪の毛に差があるのだろう」という話になり、私がたとえを出して説明しました。「以前、鯛ノ浦に帰って家族に会ったとき、私の弟にも会ったでしょ。私と弟の髪の毛の毛のようなものだよ」とたとえましたら、「およー」と納得され、私はあまりにもすんなり納得したので正直腹が立ちました。

たとえ話は、内容を的確に理解するものであれば「このたとえでなければならぬ」という縛りはないと思います。まさに今週の福音朗読箇所のとえがそれに当てはまるでしょう。「二人の人が祈るために神殿に上った。一人はファリサイ派の人で、もう一人は徴税人だった。」

(18・10) 二人の組み合わせは、ほかの組み合わせでも当然良かったわけです。深く掘り下げなければならないのは、18 章 9 節「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」むしろこちらのほうです。

イエスがなぜ、「うぬぼれている人」を相手になさるのか。その辺の事情がよく理解できませんでした。そこで、たまに参考にする「別の翻訳」に当たることにしました。私がこういうときに使うのは、ギリシャ語聖書に、英語の直訳を当てて説明している本です。そこには 18 章 9 節のギリシャ語本文を次のように英訳しています。

(And) He also spoke this parable to some of those having relied on themselves, that they are righteous, and despising the rest:

まあ皆さん英語ペラペラなので説明しなくても良いと思いますが、「うぬぼれて」という部分が”relied on themselves”という表現になっています。ここで私は納得がいききました。”rely on myself”つまり「自分により頼む人」を教え諭すために、イエスはたとえを話されたのです。

たとえ話に登場するファリサイ派の人は、完全に自分に頼った祈りを唱えています。「神様、わたしはほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦通を犯す者でなく、また、この徴税人のような者でもないことを感謝します。わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」(18・11-12)

これに対し、徴税人は自分に頼ることができないと絶望しているので、完全に神により頼んで祈っています。「神様、罪人のわたしを憐れ

んでください。」(18・13)当然、自分により頼む人の祈りよりも、神により頼む人の祈りが「義」とされるのではないのでしょうか。

別に難しい話をしなくても、神はたくさんの祈りを毎日毎瞬間聞かされているわけですから、自分自身により頼む人の祈りなど右から左に抜けて気にも留めていないのかも知れません。自分自身により頼んでいるなら、神様も必要ないと言えるかも知れません。

そこで振り返って、私たちの祈りはどうでしょうか。私は、誰により頼んで祈っているのでしょうか。特に何かを背負っている人、上に立つ人や、家族を背負っている人は、自分自身に頼って祈るべきでしょうか。もっと言うと、自分自身に頼って生きるべきでしょうか。

ついこの前の話です。晩のロザリオと一緒に参加して、珍しく真面目にロザリオを唱えていましたら、ルカ福音書「七十二人を派遣する」この箇所が思い浮かんで、10章7節「その家に泊まって、そこで出される物を食べ、また飲みなさい。」という引用とその解釈が、セットで天から降ってきたのです。

まったく新しい解釈・気づきが与えられました。ありがたいなあと思い、すぐにスマホでメモを取りました。自分自身により頼んでロザリオを唱えていたらこうはいかないでしょう。あの時に限って言えば、「私を憐れんでください」と祈っていたのだと思います。

「祈る」とは、「生きる」ことなのかも知れません。自分自身により頼んで生きていても、かつて謳歌していた若さは失われ、体力も衰え、出会った人の名前すら忘れてしまう始末です。こんな頼りない自分に頼って生きていくには、人生はあまりにも長すぎます。

むしろ、神に頼って生きるなら、長い人生の中で何を失っても恐れる必要はありません。祈りはそのことを体験する大切なひとときなのです。今からでも遅くはありません。私が、私自身により頼む祈りしかできないのなら、すべて横に置いて出直しましょう。今まで見下していたあの人の人が、ひよっとしたら神により頼んで祈る姿を、私に教えてくれるかも知れません。